労協連だより

田嶋　康利

去る５月10日、広島市とNPO法人ワーカーズコープの主催により「協同労働取組事例発表会」が広島市内で開催され、113人が参加した。

広島市では2014年度より「自ら出資して経営に参画し、生きがいを感じながら地域課題の解決に取り組む労働形態である『協同労働』により、就業や社会参加を希望する意欲と能力のある高齢者（満60歳以上の者）の『社会的起業』を促すためのプラットフォームを構築し、その結果と課題を検証する」として事業が行われ、ワーカーズコープが事業を受託。自治会やNPOでの活動の限界を実感した地域住民が、協同労働プラットフォーム事業に参加し、環境や福祉などの地域の課題を解決する協同労働の団体を立ち上げ、現在12の団体が広島市内で活動を進めている。

本年度の事例発表会では、労協連古村専務の講演に続いて３団体からの報告が行われ、協同労働で立ち上げを決意する思いから立ち上げに至る取り組みに参加者が熱心に聴き入った。

協同労働団体「ケサラ」は、「高齢期を生き生き暮らしたい」との思いで、話し合いを大切に、多世代交流サロン、生活総合支援、貸しスペース事業、認知症サポーター養成講座、地域懇談会などの活動に取り組んでいる。

町内会の会長（活動）を経験した方が、地域の活動を持続的に進めるために、協同労働を選択して立ち上げた「Go 郷・まつむね」では、町内会活動を支え、日常のつながり、一人ひとりの出番を理念に、たまり場では「井戸端サロン」や健康体操、小学生の学習支援、庭木の剪定や草刈り、空き家管理などの地域の困りごと支援、身近な環境整備などの活動を行っている。

「元気で楽しい東山をつくろう会」の立ち上げは、町内会役員３人のぼやき「立ち上げた町内会の役員を15年やっているが、次に引き継げない」から始まった。町内会会員にアンケートを実施していたころにワーカーズコープと出会い、協同労働セミナーに参加して、とりあえず役員でやってみようと協同労働プラットフォーム勉強会に参加。少子高齢化する地域で町内会の役員の交替が進まない、行事のマンネリ化、会員数の減少などの課題に対して、ワークショップや男性のうどん教室、カフェサロン、夏祭りなどのイベントから人材発掘、全世帯アンケートの実施から地域にあったら良いもの、支援してほしいこと、支援できること、趣味やスキルなどを聞き取り、準備会を開催。アンケートを参考にカフェサロン、困りごと支援、各種教室などを計画、活動を開始している。

報告者から「協同労働をはじめて良かったことは、意見がぶつかりことがあ

るが、やっていて楽しい」と語るのが印象的であった。

2017年度の広島市の協同労働プラットフォーム事業は、６月14日から７月７日まで11会場で「まちしごと勉強会」の開催からはじまる。

この広島市からはじまった協同労働プラットフォーム事業は、北海道恵庭市に続いていくつかの自治体で、さまざまな切り口からの実施が検討されている。また、自治体からの委託を待たずに、まちづくりのためのワーカーズコープ設立を応援する、自前のプラットフォームも千葉県佐倉市の中志津自治会で始まっている。

協同労働プラットフォーム事業の実践は、住民が自ら暮らす地域の課題と将来を直視し、その充実のために立ち上がるとき、皆が地域の主体者となり、力を合わせる協同労働の働き方が大きな力となることを示している。

協同労働の協同組合が法制化される時代に、先駆的に取り組まれている協同労働プラットフォーム事業は、法制化の必要性をあらためて社会に求めており、全国に広げていきたい。